

# 匝瑳探訪

## 春を告げる

今年の冬は記録的な「暖冬」ということで、春の訪れが早いように感じられます。

稲作農業が生活の中心であったこの地域では、年中行事もそれと結びついて行われてきました。二月八日は「事八日」とい

う「札を竹にはさんで立てました。お寺や神社の入り口に大きなワラジなどを吊るすことと同じ目的があります。

こうした行事は、「辻切り」「道切り」などと呼ばれ、平坦地の集落などで見られます。終戦直後にまとめられた「年中行事録」にも、明治の終わりまで栢田地区などで、正月と9月に集落ごとに寺から受けた御札と注連縄を村境に張り、「大辻切り」と呼んでいたとあります。

また、「オダイハンニヤ」といい、大般若経（だいはんにゃきょう）というお経を入れた箱をかついで家いえをまわる行事もあります。これは、このお経が災害や疫病を防ぎ豊作をかなえるものとして古くから信仰されたためで、「村祈祷（むらさきとう）」の一種といえます。

全国的には2月8日を「コトハジメ」、12月8日を「コトオサメ」と呼ぶ地域と、その逆に正月を中心とし2月8日を「コトオサメ」とするところもあるとされます。

例年、2月8日過ぎからこの地域で田んぼを耕すなど農作業の始まりを目にすることができ、伝統行事である「大蛇まつり」や「オダイハンニヤ」は、春を告げる行事といえるでしょう。

関八日市場図書館

☎73・3746

わらで作った大蛇にお神酒で魂を入れる（豊栄地区時曾根の大蛇まつり）

は一般的に300年ほど前の元禄時代以降のこととされています。1745年（延享2年）の記録では、時曾根村の家数15軒、人数99人、馬6匹とあり、1732年（享保17年）には「村中」で庚申塔をたてました。

当日、各家から持ち寄ったワラで、長さ3から5メートルほどの大蛇を3匹つくり、お神酒で魂を入れたあと、それを集落の入り口3か所に吊るし、魔除けとします。古くから悪い病気などは道から集落に入ってくる信じられ、それらを防ぐためにこうして大蛇を吊るしたり、注連縄しめなわ（を張ったり祈禱きと

